

舜子変文と『二十四孝』

— 『二十四孝』の誕生 —

坪井直子

〔抄録〕

「二十四孝」は日本文学に少なからぬ影響を与えた中国の孝子説話であるが、その形成あるいは伝来の過程は、未だ謎が多い。本稿は、冒頭話である中国の伝説の皇帝「舜」の説話を取りあげ、同じく「舜」の孝子説話を伝える孝子伝や舜子変文を通して、その孝のあり方を明確にするとともに、その伝来の過程を考察する

ものである。また、そのことに関連して、「舜」の孝が意味するところを孝経とも絡めて考え、「二十四孝」において「舜」の説話が冒頭である理由について探ってみたい。

キーワード…二十四孝、孝子伝、舜子変文、御伽草子『二十四孝』

一

二十四孝の冒頭を飾るのは、中国の伝説の皇帝「舜」である。舜は聖帝として知られる一方で、非常に「孝」にあつい人物としても知られている。舜の孝を伝える文献は数多くあるが、御伽草子『二十四孝』「大舜」（以下草子とする）では次のように伝える（洪川板に拠る）。

大舜

隊々耕春象 粉々耘草禽

嗣堯登宝位 孝感動天心

大舜はいたつてかうくゝなる人なり。ちちの名はこそうといへる。一たんかたくなにして、母はかだましき人なり。おと、はおほひにおごりて、いたづら人なり。しかれども、大舜はひたすら孝行をいたせり。ある時歴山と云所に耕作しけるに、かれが孝行をかんじて、大象がきたつて田をたかやし、又鳥飛きたつて田の草をかきさきり、かうさくのたすけをなしたるなり。扱其時天下の御あるじをば堯王と名づけ奉る。ひめぎみまします、あねをば娥皇と申、いもとは女英と申侍べり。堯王すなはち舜の孝行なることをきこしめしおよばれ、御むすめを後にそなへ、終に天下をゆづり

給へり。これひとへに孝行のふかき意よりおこれり。

草子では、舜の歴山での耕作を舜の孝に感じた象や鳥が助ける、という話を伝えており、それが話の中心であることは、挿図が、舜と一緒に象と鳥が耕作している様を描くことからわかる。しかしながら、草子の記述では、なぜ歴山での耕作が孝の行為となるのか疑問が残る。なぜならば、耕作は生活の糧を得るために普通に行われる行為で、孝の行為として特に採り上げるものではないと考えられるからである。僅かに「しかれども、大しゆんはひたすら孝行をいたせり」という記述から、何らかの話が別にあつたことが推測されるが、草子の記述からは具体的なことは想像し難い。



【二十四孝】大舜図

この疑問は、草子の基とされる、元の郭居敬が選した全相二十四孝詩選（以下詩選とする）についても言える。次に詩選を上げる（竜谷大学蔵乙本に拠り、甲本を参照した）。

大舜

隊々耕春象 粉々耘草禽

嗣堯登宝位 孝感動天心

大舜至孝、父頑母畱弟象傲、舜耕於歴山、有象為之耕、鳥為之耘、

其孝感如此、堯聞之妻二女、讓以天下。

詩選では、「舜耕於歴山、有象為之耕、鳥為之耘、其孝感如此」として、「孝感」が中心に述べられており、孝の行為については「大舜至孝」とあるだけである。そして、草子にあるような「しかれども大舜はひたすら孝行をいたせり」という記述もなく、疑問は深まるばかりとなっている。

そこで、本稿は、二十四孝の舜譚（以下二十四孝の舜譚を二十四孝とし、二十四孝全体を指すときには「二十四孝」とする）が、「孝感」を中心に述べて、孝の行為については極めて簡単な記述しか持たなくなつた経緯を探り、舜譚が、「二十四孝」の冒頭を飾る理由について考察を試みることにしたい。

二

舜の伝記は、史記（五帝本紀）、孟子（万章上）にあるが、これらは舜の聖徳を主眼として記述していて、孝について述べたものではない。

「二十四孝」と同じく、孝を主眼とする文献を上げるならば、想起されるのは孝子伝である。この孝子伝の盛衰について、西野貞治氏が、次のように簡潔に述べられている。¹⁾

家族制度が極めて古くから発達した中国では、その維持のために孝行の教化が徹底され、孝行の実践例を掲げた孝子伝・孝子図などと題する書が、孝経と共に童蒙の必修書とされ、六朝末迄に十数種以上も出現した。此等の書が盛行したことは種々の資料から偲ばれるが、伝存の記録は南宋の鄭樵の通志略を下限とし、稍後の晁公武・陳振孫らの博搜家にも見られていぬようで、或は南宋の兵燹に佚われたものが多いかと考える。

中国では失われたと考えられる孝子伝であるが、日本では、陽明文庫と京都大学の清家文庫（舟橋家旧蔵）に所蔵されており、そのことは既に周知のこととなっているであろう。この二つの文庫に伝わる孝子伝は、同一系統とみなされるもので、陽明文庫蔵の孝子伝が舟橋家旧蔵の孝子伝より古い型を存していると考えられている。この陽明文庫蔵孝子伝ではどのように舜の孝を伝えているだろうか。次に舜の条を上げる（黒田彰先生ご所持の写真に拠る）。

帝舜重花、至孝也。其父瞽叟頑愚、不別聖賢。用後婦之言、而欲殺舜。便使上屋、於下燒之。乃飛下、供養如故。又使治井没井、又欲殺舜。々乃密知、便作傍穴。父畢以大石填之。舜乃泣東家井出。因投歷山、以躬耕種穀。天下大旱、民無取者、唯舜種者大豊。其父填井之後、兩目清盲。至市就舜糶米、舜乃以錢還置米中。如是非一。父疑是重花。借人看枋井、子无所見。後又糶米、对在舜

前。論賈未畢、父曰、君是何人、而見給鄙。將非我子重花耶。舜曰、是也。即來父前、相抱号泣。舜以衣拭父兩眼、即開明。所謂為孝之至。堯聞之、妻以二女、授之天子。故孝経曰、事父母孝、天地明察、感動乾靈也。

陽明文庫蔵孝子伝には、父母が舜を殺そうとするにも拘らず、舜は父母に孝を尽くした話が記されている。この舜の条については、西野氏の重要な指摘がある。それを次に上げる。²⁾

此の孝子伝の説話の中に、既存の他の諸書と著しく異なる記載を持つものが見られる。そしてそれは俗文学の発達を考える上に、重要な異議をもつものである。先ず儒家の理想像とされる舜の伝についてみると、……尚書・孟子・史記などの正確な古典の記載と著しい対照をなす。即ち比較をなし得る共通点について考察をすると（五帝本紀）史記では先ずその徳行を認められて堯の二女を娶り、堯の試をうけて歴山に耕し、次いで焚廩掩井の厄を経た後で帝位を譲られるのであり、孟子（万章上）は歴山に耕するの記載を欠く外は史記に等しい。即ち堯の讓位を受けることの外は悉く孝子伝とは順序が逆であることが注意される。そしてこの孝子伝と前述の順序のほぼ一致するものに論衡（吉驗篇）の記述があるが、ここに見える如き舜が歴山に於ける豊作を得たこと、瞽叟がその悪業の為に盲目になること、また舜の孝心によつて盲眼が開かれること等の記述は見られない。ところで、以上に述べた諸点が悉く此の孝子伝と符合し、一層詳細な記述を持つものに敦煌出土の舜子至孝變文（劉復、敦煌掇瑣、上輯、十一）が存する。

西野氏が注目された史記・孟子と、孝子伝・舜子変文 (S四六五四・P二七二一) の相違点について、もう一度みてみよう。

まず、孟子・史記では、

① 先ずその徳行を認められて堯の二女を娶る

② 堯の試をうけて歴山に耕す

③ 焚廩掩井の厄を経る

④ 帝位を譲られる

の順序であるのに対し、孝子伝や舜子変文では、

③ — ② — ① — ④

となっており、さらに②と①の間に、

a 歴山で豊作を得て、その米で父母を養う

b 瞽叟はその悪業の為に盲目になるが、舜の孝心により開眼する

という要素が加わっている。二十四孝の順序は、

② — ① — ④

となっていて、③の要素は欠けるが、孝子伝・舜子変文と同じ順序である。このことは、二十四孝が、孝子伝や舜子変文と同系列にあったことを示唆しているのではないか。そのように考えて、二十四孝に、③とa bの要素を加えてみれば、二十四孝における舜の歴山を耕す行為が、従順に父母と弟を養う「孝」の行為として理解出来、決して平凡な行為ではなかったことがわかる。

二十四孝と孝子伝・舜子変文が同系列であることを示唆する文献は他にもある。それは、五片の敦煌文書からなる『敦煌変文集』巻八所収「孝子伝」(以下敦煌本孝子伝とする)³⁾である。敦煌本孝子伝は、

類書系統 (P二六二一、S五七七六) と変文系統 (S三八九、P三五三六、P三六八〇) に分かれるが、舜の話は、類書系統と変文系統の両方にあり、その話の要素と順序は、両者とも孝子伝・舜子変文のそれと同じである。ところで、拙稿でもふれたが、この敦煌本孝子伝の変文系統には、睽子の条があつて、「二十四孝」と関連が深いと考えられる。⁵⁾次に変文系統の舜の話を上げる(原本写真に拠り、『敦煌変文集新書』⁶⁾を参照した)。

舜子者、冀邑人也。早喪慈母、独養老父瞽叟。父取後妻、妻譖其夫、頻欲殺舜。令舜濤井、与石压之、孝感於天、激東家井出。舜奔耕歴山。後聞米貴、将来冀都而糶。及見後母、就舜買米。舜識是母、密与其錢及米置囊中。如此数度、後母至家、具説上事。瞽叟擬是舜、令妻引手、遂往市都。高声喚云、「子之語声、以似吾舜子」。舜知是父、遂發人向父親抱頭而哭、以舌舐其父眼、其眼得再明。市人見之、无不驚怪。詩曰

瞽叟填井自目盲 舜子從來歴山耕

将来冀都逢父母 以舌舐眼再還明

又詩曰

孝順父母感于天 舜子濤井得銀錢

父母抛石压舜子 感得穿井東家連

韻文部分は舜子変文と同一であり、このことも、二十四孝が孝子伝や舜子変文と同系列である傍証となる。

さて、二十四孝が、孝子伝や舜子変文と同系列の話であることはわかったが、二十四孝の話の中心である「象為之耕、鳥為之耘」（以下象耕鳥耘とする）について、舜子変文に次のような記述が存在する（訳文は入矢義高氏編『仏教文学集』⁷に、原文は原本写真に拠り『敦煌変文校注』⁸を参照した）。

この教えを受けますと、舜はすぐさま母親の墓を尋ね、母の現身に会って流るるは血の涙。母が舜に申さるるよう、「吾子よ、家へは帰るまいぞ。そなたはまだまだ先がある。西南のかた歴山へお行き。そこで田作りしておれば、きつと偉い人になりますよ」舜は母の言葉に従い母と別れて山中へ行き、百頃余りの荒れ畑を見つけ、胸のふさがる思い。種子も牛も、手に入れようすべもなし。天その至孝を見そなわしたもうや、群なす猪が口で耕やし畝作り、百鳥は種子をくわえて畑に播き、天は雨ふらせて灌漑してくれます。その年は天下は凶作、ただ舜のみは豊作で、数百石の収穫。

（舜即尋覓阿嬈墓。見阿嬈真身、悲啼血。阿嬈報言舜子「兒莫帰家、兒大未足。但取西南角歴山、躬耕、必當貴。」舜取母語、相別行至山中、見百余頃空田、心中哽噎。種子墾牛、無処取之。天知至孝、自有群猪以觜耕地開壟、百鳥銜子拋田、天雨澆漑。其歲天下不熟、舜自独豊、得數百石穀米。）

舜子変文では、象と鳥が、群猪と百鳥になっているが、象耕鳥耘とみなして差し支えないであろう。武田雅哉氏によれば、猪即ち中国の豚は耳が大きくて鼻が長いという点で、象とは似たものとして認識されていたという⁹。舜子変文は俗講として話されたものであるから、象よりも身近な動物である豚に作り変えたと考えられる。孝子伝には該当部分が無いのであるが、この象耕鳥耘の説について、鳥居龍藏氏が次のような指摘をしている¹⁰。

彼（筆者注舜）の若きころの歴山における耕作物語は、『史記』「五帝紀」、「淮南子」、「搜神記」にみられる。しかしこれらの書には彼の耕作を助けた多数の象の出現については記されていない。後漢代の書である王充の「論衡」「書虚篇」には、「註にいう、舜は蒼梧に葬られた。象が彼のために土地を耕した。禹は会稽に葬られた。鳥が彼のために土地を耕した」と述べている。晋の皇甫謐の『帝王世紀』にも、「舜は蒼梧に葬られた。彼は彼のためにしばしば土地を耕した一群（あるいは数群）の象をもっていた。禹が会稽に葬られたとき、数群の象が土地を耕したといわれる」と述べている。この記載には歴山において舜が手助けにきた象とともに耕作したとは記していない。しかし『図書集成』「禽蟲典」にみる陸龜蒙の「象耕鳥耘篇」には「舜がまだ一介の庶民として歴山で耕作していたころ、彼の高德な善行にうたれて象は彼のために鋤で耕し、鳥は除草して耕したといわれる」と述べている。舜が象の手助けをえて歴山で耕作した物語がここにみられるのである。たとえこの物語が文献にみられなくても、古いころからお

そらく民間の説話になつていたことは推測される。中州で発見され、羅振玉が所蔵する二十四個の磚〔筆者注山西省大寧県中州にある遼代の墳墓から発見されたもの、羅振玉『古明器図録』収〕にみられる既述の絵の中には、立っている男、上空を飛ぶ二羽の鳥、一頭の象が描かれているものがある。表題はみられないが、この磚と上記物語との関連を示唆している。

この指摘は、鸞峯の墓の主室の壁面に描かれた、舜図とみられる画像磚についてなされたもので、鸞峯の墓とは、鳥居氏が1930〜40年にかけて調査した遼寧省鞍山市東南部の白家堡子にある遼代の墳墓のことである。この墓に描かれた舜図は、現在出土している宋、遼・金の他の二十四孝図から鑑みて、二十四孝の舜図と考えられる。同様に羅振玉蔵の画像磚もまた二十四孝図であろう。つまり、鳥居氏は、二十四孝の象耕鳥耘について述べられたわけである。鳥居氏が指摘された三つの文献のうち、歴山を舞台としている文献は、陸龜蒙の「象耕鳥耘弁」^①だけである。これは、笠澤叢書三(陸龜蒙撰)にある論で、どのように象耕鳥耘が論じられているか、次に上げる(文淵閣四庫全書影印に拠る)。

世謂、舜之在下也、田於歴山、象為之耕、鳥為之耘、聖德感召也。如是、余曰斯異術也、何聖德歟、孔子叙書於舜曰、濬哲文明聖德、止於是而足矣、何感召之云云乎、然象耕鳥耘之說、吾得於農家、請試弁之、吾觀耕者、行端而徐起、撥欲欲深、獸之形魁者、無出於象、行必端履必深、法其端深、故曰象耕、耘者、去莠拳手務、疾而畏晚、鳥之啄食務、疾而畏奪、法其疾畏、故曰鳥耘、試禹之績

大成、而後薦之於天、其為端且深、非得於象耕乎、去四凶恐害於政、其為疾且畏、非得於鳥耘乎、不然則雷澤之漁、河濱之陶、一無感召何也、豈聖德有時、而不德耶、孟子曰、堯舜與人同耳、而好事者、張以就其怪、怪非聖人之意也、吾病其書之異端、殿之使合於道、人其從我乎、雖不從吾、亦不能變其說。

陸龜蒙は、象耕鳥耘を納得の出来ない民間の異端説として論じていることがわかるが、気に掛かるのは、象耕鳥耘が聖徳によるものとされていることである。このことは、論衡にも当てはまる。論衡(書虚篇)では、象耕鳥耘を次のように記す。

伝書言、舜葬於蒼梧、象為之耕、禹葬會稽、鳥為之田。蓋以聖徳所致、天使鳥獸報祐之也。世莫不然。而孝実之、殆虚言也。

「象耕鳥耘弁」同様に、象耕鳥耘を聖徳のもたらしたものとされているのである。これらのことを踏まえるならば、象耕鳥耘は孝ではなく聖徳を表すのであるから、舜子變文や二十四孝に記される象耕鳥耘は齟齬をきたしているといえる。しかしながら、陸龜蒙は六経に通じていた人物であるから、象耕鳥耘を聖徳と受け取ったのであろう。「象耕鳥耘弁」を注意深くみるならば「世謂」とある。「世謂」即ち民間においても聖徳と受け取られていたとは限らない。例えば、日本の文献である東大寺諷誦文稿には次のような歴山の記述がある。

重花擔^{ハオヒモテ}盲父^{クカヘ}而耕^レ歴山^ヲ而^レ養^レ盲父^ヲ。
これは、孟子(尽心上)の

桃応問曰。舜為天子。臯陶為士。瞽叟殺人。則如之何。孟子曰。執之而已矣。然則舜不禁乎。曰。夫舜惡得而禁之。夫有所受之也。

然則如之何。曰。舜視棄天下。猶棄敝屣也。竊負而逃。遵海濱而
妃。終身訢然樂而忘天下。

に關連すると考えられるが、舜の孝を示すものとなっている⁽¹²⁾。これら
のことから推測するに、正史や儒書には記録されていない舜の孝を述
べる話が民間その他のところにあつたのではないか。そのことは例え
ば、劉向孝子伝（法苑珠林卷四十九所引）が、

舜父有目失始時微微。至後妻之言。舜有井穴之。舜父在家貧厄。

邑市而居。舜父夜臥夢見一鳳皇自名爲鷄。口銜米以哺。已言鷄爲

子孫視之是鳳皇。黃帝夢書言之。此子孫當有貴者。舜占猶也。比

年糴稻穀中有錢。舜也乃三日三夜仰天自告過。因至是聽常与市者

声故。一人。舜前之目霍然聞。見舜感傷市人。大聖至孝道所神明

矣。

といった変わった話を伝えていることから想像できる。

舜の伝記は、青木正兒氏が「一大恨事は現今の「尚書」は「舜典」
が欠けていることである」と述べられているように、舜の伝記として
最も基本となったであろう尚書の舜典は現在失われてしまつてい

る。尚書は、人々の間に深く浸透しており、舜もまた聖帝として有名な人

物である。たとえ舜典が失われているとしても、その内容は、何らか

の形で伝わり、人々は、史記や孟子からは窮い知ることの出来ない伝

記、例えば孝についての伝記などを、知ることが出来たと考えられる。

また尚書だけではなく、他にも舜の伝記を記したものがあつたかもし
れない。象耕鳥耘とはそのような類の舜の伝説であり、それが舜子変
文と二十四孝にあつて孝子伝にないということは、変文と二十四孝が

より近い存在の文献であるといえる。しかし二十四孝が、舜子変文に
あるような具体的な孝の記述を欠き、象耕鳥耘を中心とする孝子譚に
なっていることは、やはり両者が異なっていることを示している。そ
の意味では「二十四孝」は新たな舜譚を登場させているのであり、そ
こに新たな孝子説話即ち「二十四孝」誕生の姿を見ることが出来るだ
ろう。

四

孝のあり方や、孝を實踐する上で、基本になるものとされたのが孝
經である。その孝經には次のようにある。

・夫孝始於事親、中於事君、終於立身（開宗明義章）。

・子曰、愛親者、弗敢惡於人、敬親者、弗敢慢於人。愛敬尽於事親、
然後德教加於百姓、刑於四海。蓋天子之孝也。呂刑云、一人有慶、

兆民賴之（天子章）。

これらの記述について木島史雄氏は次のように述べている。⁽¹³⁾

ここに語られているのは、「孝」と天下の政治との關係である。
前者は、個人的な孝行為が最終的には「名を揚げ親に榮えあり、
故に身を立つ」ことになるのが理想だといふかんがえである。ま
た後者では、「親を愛する者」「親を敬する者」などと孝の行為が
語られたあと、続いて唐突に「徳教を百姓に加え、四海に刑せら
るる」などという統治者の立場からの孝が語られ、視点がすり変
わつて「天子之孝」につながっていく。前者のような仕える側か

らの孝であれ、後者のような治める側からの孝であれ、いずれにせよ孝が天下の政治につながる徳目であることが語られる。天下の政治につながるということはこの際、理想国家論であるから、「孝」はここでは理想国家構築のための手段と見做されているわけである。「孝経」は儒の教えを載せた書物として重視されていたから、この時代、孝と天下の政治を結び附ける考えがゆき渡っていたことは確かである。したがって孝が持つ意味合いには、先にみたような宗教の結束強化の手段などの比較的目的のはっきりとした身近なもの以外に、直接的にはどうつながるのか定かではないイメージスローガンの意味も附与されていたと言えるであろう。……「孝」の称揚が、余りにも身近な行動規制と、遠くかけはなれた国家理念の両面からなっているために、逆に論理や検証などという孝の強制力を阻害しかねない要素の介入を許さず、その分きわめて強い力になっていったのではないかと考えられる。……つまり孝は、国家の統治理念の一つであったのである。……孝の称揚がとりわけ強調されたのは、たしかに宗族の結束強化策として直接に有効であったことにも理由はあるが、それだけでなく、儒というすでに万人の支持を獲得した理念の中からスローガンを選ぶことよって、この、かなりの犠牲を強いることになる「孝」という理念の実践」にたいする行為者の躊躇いを無くし、むしろ困難を克服して正しい行為をするという満足感を与えるという思慮があつて選ばれたように思われる。

舜の行為は、聖徳にも孝にも解釈される。そのことは、天子の孝が

持つ本質的な問題に由来するものであつたといえる。個人的な孝行が理想国家構築のための手段となるのである。このことを二十四孝で考えてみれば、歴山で耕すという個人的な行為が、天下を譲られるという国家的な行為と変じるのであり、舜の孝は天子の孝をよく体現しているといえるだろう。そして、このような天子の孝を、「二十四孝」が冒頭に置くということは、孝が理想国家を築く手段であることを表しているように思う。「二十四孝」では、舜以下孝子が様々な孝の行爲を行うが、それらは、しばしば理解に苦しむほどの困難を伴う。その困難は、「孝」の理念のもとに克服され満足感に変じるのであろう。そこに国家の統治理念の関与がみられるのではないか。このようにみれば、「二十四孝」の舜譚が、徳田氏も指摘されているように、瑞祥を示す象耕鳥耘であることは、孝を賞賛し奨励するという点において誠に象徴的で、「二十四孝」の冒頭を飾るにふさわしい孝子譚であつたといえるだろう。

(図は市古貞次氏編『御伽草子』「二十四孝」(三弥井書店、昭和46年)に拠る。)

〔注〕

(1) 西野貞治氏「陽明本孝子伝の性格並に清家本との関係について」(人文研究)7・6、昭和31年7月。

(2) 西野氏注(1)前掲論文。

(3) 王重民氏等『敦煌変文集』(人民出版社、1957年)。

(4) 王三慶氏『敦煌類書』(麗文文化事業股份有限公司、1992年)など参照。

(5) 拙稿「啖子探源——二十四孝成立史のために——」(愛知県立大学大学院国際文化研究論集) 1、平成12年3月)。

(6) 藩重規氏『敦煌変文集新書』(文津出版社、1994年版に拠る。〈初版は、中国文化大学中文研究所、1984年版〉)。

(7) 入矢義高氏編『仏教文学集』(中国古典文学大系60、平凡社、昭和50年)。

(8) 黄征、張涌泉氏校注『敦煌変文校注』(中華書局、1997年)。舜子変については、金岡昭光氏「孝行譚——「舜子変」と「董永伝」——

『敦煌の文学文献』(講座敦煌9、大東出版社、平成2年) II三、同氏「敦煌本舜子変再論補正——附斯坦因四六五四本校勘訳註——」『敦煌文献と中国文学』(五曜書房、平成12年) 二などの論がある。

(9) 武田雅哉氏「八戒絵姿考」『猪八戒の大冒険』(三省堂、平成7年) 四章(金文京氏に「教示賜りました」)。

(10) 鳥居龍藏氏「遠代の画像石墓」『鳥居龍藏全集』第五卷(朝日新聞社、昭和51年)所収、I 鸞峯の墓注23。

(11) 晋皇甫『帝王世紀』(太平御覧八九〇獸部二象所引)には次のように記される。

帝王世紀曰、舜葬蒼梧下、有群象常為之耕。又云禹葬会稽祠下、有群象耕田

(12) 川口久雄氏は、この部分を「董永説話と混同しているらしい」とされている(『敦煌本舜子変文・董永変文と日本説話文学』『敦煌よりの風』4(明治書院、平成12年) II二、初出「MUSEUM」283、昭和49年、10月)。

(13) 青木正兒氏「堯舜伝説の構成」『支那文学芸術考』(弘文堂書房、昭和

17年)。舜の伝説については、大谷邦彦氏「孟子」における舜説話」(『中国古典研究』14、昭和41年12月)、金文京氏「敦煌本「舜子至孝変文」と広西壮族師公戲「舜児」」(『言語文化研究所紀要』26、平成6年12月)、佐藤長氏「堯舜禹伝説の成立について」(『中国古史論考』(朋友書店、平成12年) 三などの論がある。

(14) 木島史雄氏「六朝前期の孝と喪服」『中国古代礼制研究』(京都人文科学研究所、平成7年)。

(15) 徳田進氏「舜の孝子説話の発展と拡大」(『高崎経済大学論集』10巻 1・2・3合併号、昭和42年11月)。

(つばい なおこ)

文学研究科国文学専攻博士後期課程

(指導教員・黒田 彰教授)

二〇〇〇年十月十八日受理

